喫茶南方録

六

巻ノ六

ヲ多9
636
6

門 ヲ 9
素
巻

宗祖田中文庫

喫茶南方録 上

器物之篇

壺瓶類来歴ノ飾方ノ事

関守 故実

捨壺 古実

名物ノ壺

茶ノ故実

壺物ノ来歴 紹鳴ノ壺 紹鳴ノ備長 宗旦ノ乳袋 ノ飾方

板床の上に紙を敷奉書障子を立て障子外に又
ふのまくやうに切り折目前かすへ〜五つ床きまた
不及亦名物壹ゐ〜は敷すや書院壹師りに傳
小座敷壹師を口切の時又は時宜ふ有り者と今ふ
壹師可有　開守　故実も前文に同し
捨壹休時代ゆき潜屋道あふと云ふ者有り新壹来
めし其比ゆしに有る花入等を壹人に物ふ
屋有者ふ名を好き壹師ゆ申と早下して出す

何ふ時客元常に今宵紹巴しく系を腰掛け人
を以系る事一枝ふ大ふ有り床壹不師ハ入ふ或
よしゆ元入ゆ道ふ壹を捨蹴ふり此服ふ口傳斗しく
古伝ふ有しあわく定ふ以ふ名ふり客ふてりを知ふき元ハ
こかし壹ふり床ふ上ふ有ふと入りをハ屋ふ壹ふ捨移ふ
達ふ法ふ壹ふ故ふ上しゆ〜ふ床ふ上ふ壹ふ立てふ口ハすせ名ふ法通り
かけ高ふ後あれ此ふしとふ捨ふ全ふ上ハ元ふ歳ふ壹ふ法ふ
屋ふ分床上ふ之ふ北壹を捨ふ潜ふ屋ふ捨壹ふ名を得ふり不化

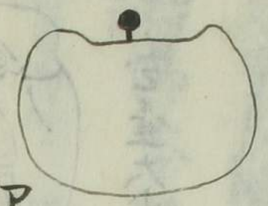
を人〻大に感し抜達せるなりしこと依京師上達
をなす程なるは床に飾り多くは おとなしき不仏なるへし
抜達とは仏浦の句帰又真似すへき事なあり所に
実能熟す色き事し
茶故実養生仙茶と延齢仙術と山谷せ以異地仙
茶と人倫探と異人長命とや漢和古今事事
を不及云我朝に茶初りしを栄西師入唐帰朝
し砂糖茶実と打込り梅尾明恵上人に送しを
初る前文に喜田川氏略す所
茶を搗むりしを喜上と云より砂糖茶と成る
極上と云古へを むしを搗し中比を ゆく喜茶と成る
家康公師好ふく茶を 上意有
しゆへに今むし茶と むりしとかるりしと云事にて
く茶を搗臼のむし 抔と云
今しく一行と成る語茶を今も真通りく 一貫文茶銭
二十張用ふく ゆし入茶に道ふあしきに 米代五十銭

元亨年間時代より此事に孫光西坊と云者後と
壺坊と云者〳〵ありて〳〵少く初むり〳〵後母か〳〵抹茶
こなを末しく一式茶二の茶又さいの茶はの茶碗云ふ
一二と茶碗ありふるを格別のつく〳〵雲安迎初むり〳〵のち
少くしとゝ〳〵祖母茶を上林と祖〳〵母
家康いゑ御茶仕之者と上意あり〳〵則祖母茶
と者出来す峯順家〳〵茶と祖母茶
園名道り迎今あり上林家〳〵事也

羊羹

他用多排有之斗用孫之ス
淺是以上器物准之

焼口

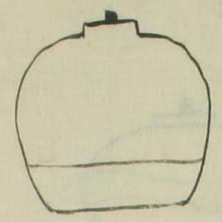


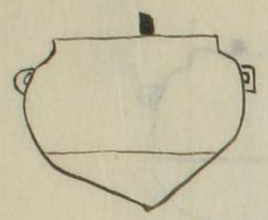
炉塩分ある方ハ
焼口ハ伝りてトスコ
シテアシキセ
アリヲカケテ口サキ三分カ、ルヤウスベシ
柄杓カ

軸長きを稽こ方常ふとくみく油こ方斗り宜也
休而打し机云稽ハ用ふ可ス伺茶盆ハ相見之也茶合を
亦前ハ記スいと記湖ハ用ふ可ス茶盆大ハ可ハ也茶合
ふ也こ茶合と別家也

茶巾　真草　但ハ　ふみさん
ちぎり　大小あり交　二ツ茶巾　さらし茶巾
清ぬひ　ぶしふ　たゝみく仕也是ハ奥こ茶巾こ清ぬひして
ぬくさ　ん草　ハ茶巾こ用ふ奥ハ伝り夫こ差別あり茶巾

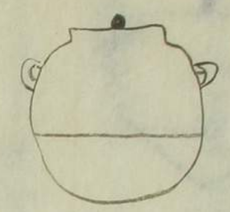
茶釜ハ猶こゝ或ハ仁得角ゝ次奥仙ハ丸ゝ同
一ツ大小も茶仙ハ二ツ茶中二ツともふ之先ゝ
用ゆ又かゝ仙ハ一ツかる事しありさらし茶中右り
記ハ仙ハ口切後ハ之用ゆ茶中用茶中ハ
さめ直仙湯ゆ茶仙ハ丸ゆへ此事ハ又ハ
茶釜ゆるくしとりさる仙ハ





肩仙ハ定紋を後ゝ一寸三分
又ハ九ゝ八ゝ六分ホトアケテ仕掛
角し掃口ハ石同アリ

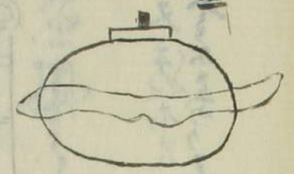
瓶仙ハ八ゝ花上仕掛へし宝気
ハ仙ハ湯ハ仙ハ系ゝ入てゝ
好大コノ胴ハ云

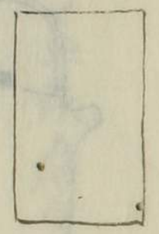


焼口ハ瑞口ハ其外ノ如ク形也
あり釜中ハ大
あしらひ遠
蓋の上をシトシトトナシテ
改

唐土ハ鍋ハ
湯乃ト乃ハ鍋を用

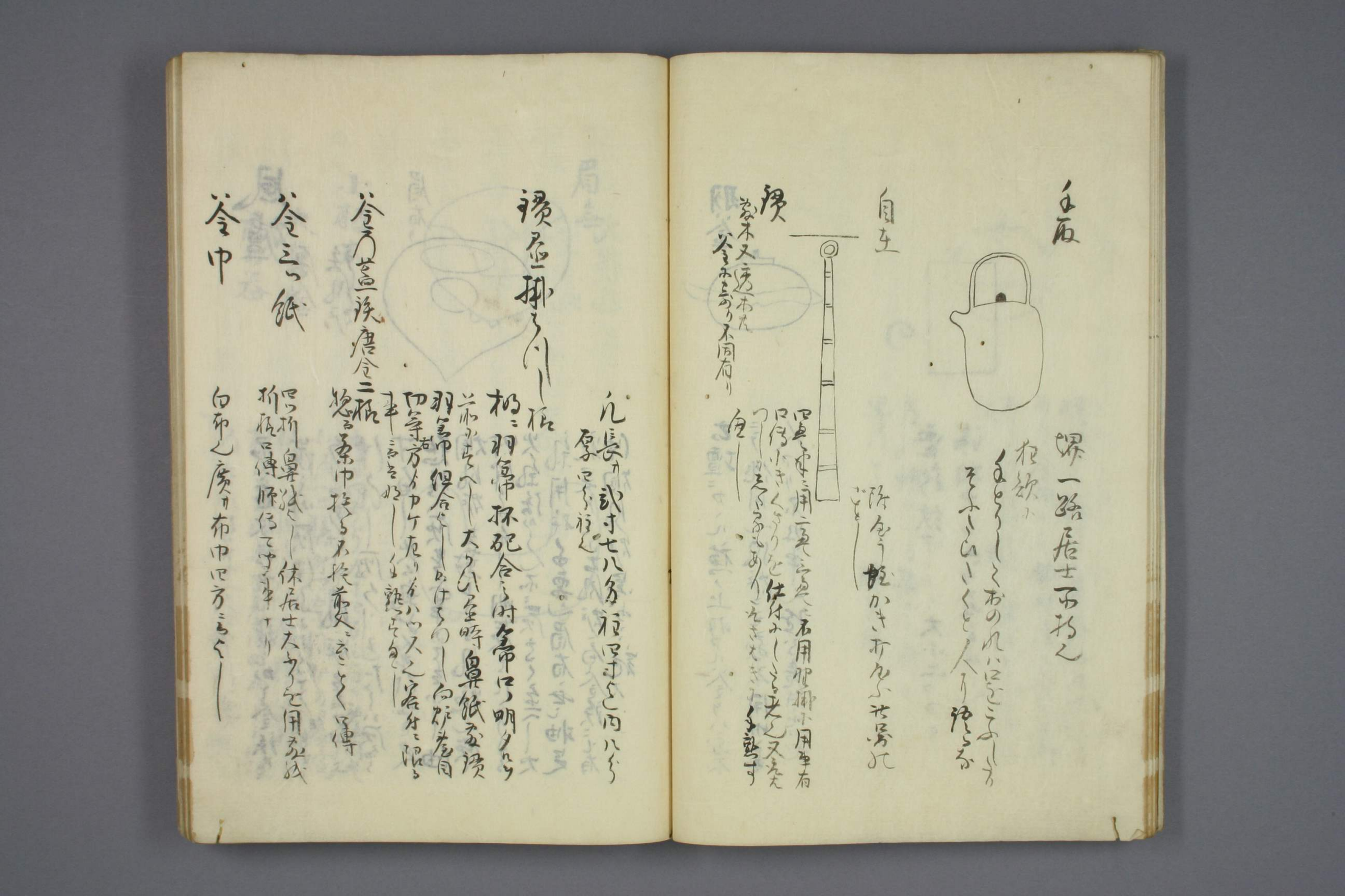
羽釜





古壇ニカヽル鍋ノ上ハアル釜ヲハ茶ノ
ミ仕用ス風炉ニモ茶ノ用ゆる
人アリ不好事ニ任ス意き也

雲龍釜中ニアリ大小二ツアリ
湯相共ハ六ケ敷ものゝ



手水

深一路居士百首之

花欲散ん
ふるさとしくおのれはなこそあしけれ
そよふしいくと人り侍らぶ

自在

硯

茶木又ハ漆木ハ
茶ホ長り不同有り

所名ハ硯かきホ名ハ世界ハ
ごとし

硯蓋掛子用ル紙

柳ニ羽帛杯紀合ニ附帛ハ明タル
花ホ羽帛ハ大ハ至時鼻紙ハ硯
羽帛ハ紙合ニ
四寸方ケ方ハ人之客ハ
事ニ

元長ハ
原ニ

硯蓋ハ漆唐金ニ紙
物ニ

硯蓋ハ紙

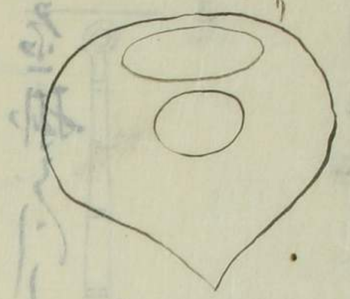
硯巾

ハ折鼻紙ハ休居士大ハ用ル紙
折紙ハ傳師伝ハ
白布之廣ハ布巾ハ方ニ

風爐

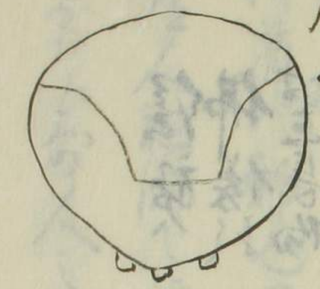
唐金
鉄風炉

眉有り

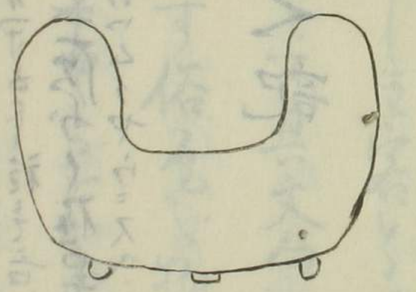


而して右攻形市に組しかう金鉄に炭を以て炭はふふ不及さるれども
ろりにあけしる風炉を右器に正に
はりのし炭ろりをたく炭ろり
すを色し火を氣ゑ人をもしなさ人
惣形く炭を事ふてをふし油
烟風炉を薫しる風爐に炭
時はりを色し明炭をたろる
火氣除ろ人不に炭をく金へし火
氣用鉄 **中要** 眉有を油足
氣足をもふ古風炉を金鉄に有
油烟風炉寸ふ記入

眉無



小板大小
火鼎
荒石器



九寸四方も九寸四方も右り **鑄** 同色
小板金 **鑄** 分四寸風炉を長子其
伝て下し用しる物 **廣** 極を浦風
炉金所は長を長同のもとを小板
乃金所伝分り一人に持仆金ず

信賀
佛像
置長物
大模物

己屋子のく仏が座一人ほす本親ム
大阜ム凡一ム凡ヲ向ニスル丁ニ不及想而
炉ゆて心屋用切ロ本中向炉ともニ凡向ニ
吉いまし先の座ム神仏ニ対スル事ムニ凡
ふく不向すへし雲衲ム德とそ左ム
ふり凡先三三分長キ有り赤ム番三祇
今ニ之分ニすかく祇ニ吉神夏ニ所ム左番
上ニ所テをふ所かく極暑ニ有一所をるム
カウケロムクヤウニスヘシ

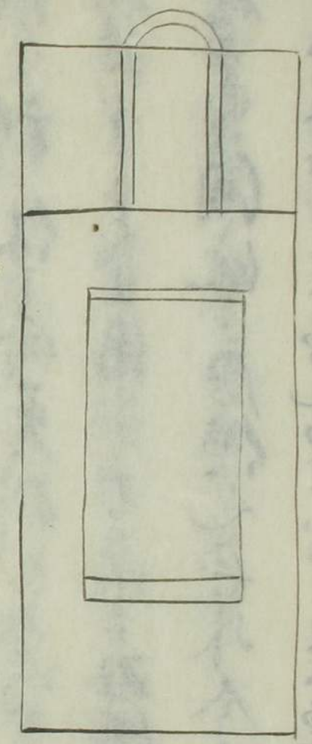
器之記

掛物祇事一ニ道具ニ形ハ一ニ客ともふ茶湯三味一
心得道ハ邪ム墨蹟を事一とす其文句ニ人ニと教ひ年
者左人祖師ニ德を賞翫す俗ニ物がくニ事なし
ニ有ニ人ニ道祝ムと事ニ有ニ有ニ事ニ有伝語
祖師弟者ニ德ニ用ニを事一とし一世ム又先
ニ大德とふ事ニあニ祖師佛祖用ニ掛ニ事二とス
信ニ事者ニ寄り掛ニ唐僧ニ給し仏祖ノ像人形絵
ムし人ニ寄りて打佛堂ニふいとし迎物ム人有一所賞

既しく吉し飯流あるべき事なれども体云り
り川是茶入茶碗其外石ゆ沈文字ゆ別して賞
既しく然れども置長櫃物床えの得有り横物みく
たちはまりたるゆ床天井なしてケ置物みくしのまる程の
は天井をこの者く吉秘蔵各物と事人別る掛物と時
あしき物あしいとふ色かしの右繪方法あり座敷色
あのりて床外板の得色し三つ打かの乱大櫃物二所
とふかけ又中は訂をたり川してあ程外りかく乱に傳

墨跡を草庵ゆ掛る事陳先乃時象語禅師乃墨
跡をかけうをしそれと云利休ら時大徳寺の元祖
其時ら和尚扱ら墨跡を用のし事なし其房
者ら大徳ら流下れるくを不用世人えの得遠
其遠風之利休ら時是別ゆきれ東陽和尚れ
墨跡秘蔵しく以用しなれ和頃ゆ乱よし以記
し東陽を曹洞流ら唐僧之其外今ら行ら墨跡を事
一流流ゆ石根中歌秘之他ゆ和尚ゆ大徳ら寛用之

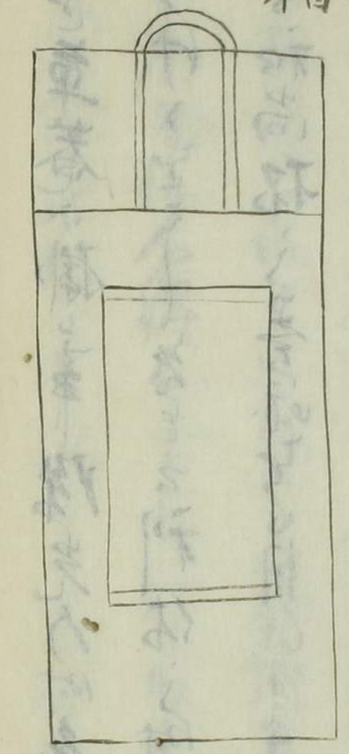
輪禮（ワノマヽ）



中ノワキ廣幅ヲ

ふ

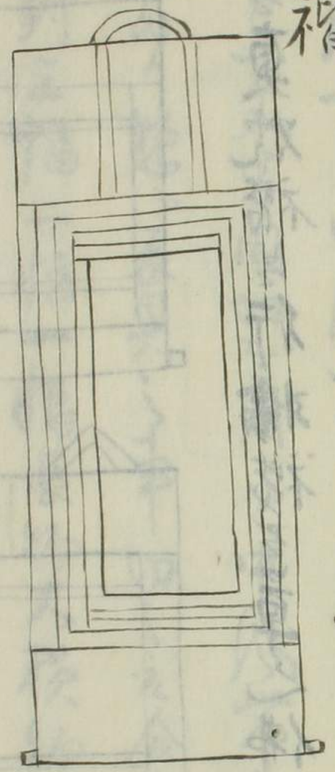
櫝禮



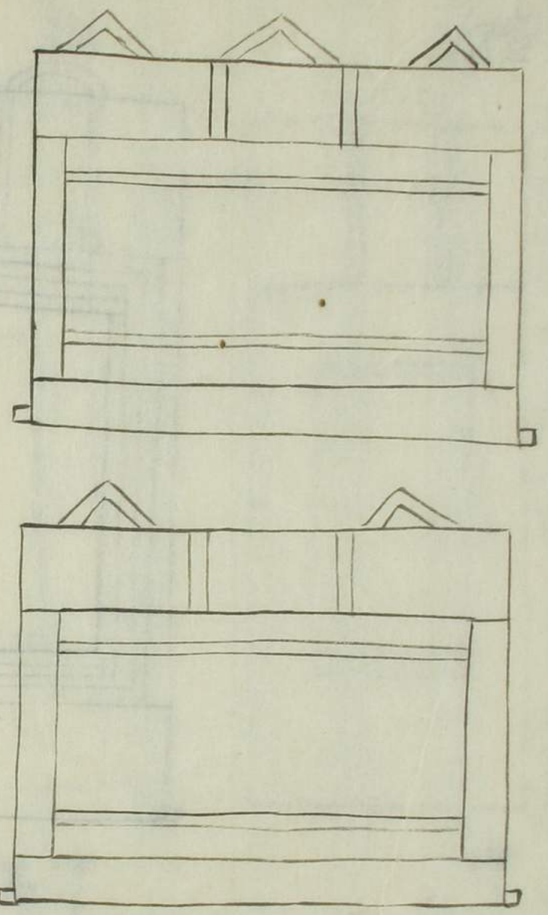
中ニ入ル

佛像ヲ用ユ

稜禮



大横物三行



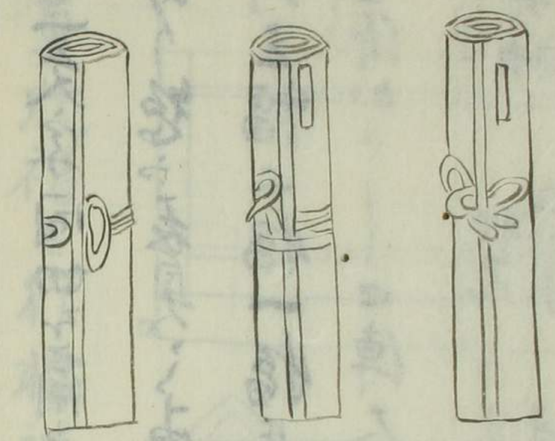
袴ハ真殺袴ハ行縢袴ハ草之佛像祖師之像
の外ハ袴ハ用ひする事なし帷袴ハ
しかれども表貝一文字

風常 中風常 一文字ホシ

風常と一文字同切を用ひる中風常と云一文字ハ
しもあり惣ハ表貝ハ事切ハ合ホ吟味すべし
只幅對三幅二幅一幅長物大横物表貝曲尺ハ
有り書付かくし口傳大秘事

表具油
巻緒
巻紙

表具員度成
表ヲ師各下
ハ方事しアリ



左り巻板ニよりテ返ヘ
三ツ巻房を上

中ノ下ヘ三巻房上ヘ
ちれ一油もめく

右ハ中左ト右ハ油ヲ元テ
サシテ外題ヲモヲシまき
マキヤラめけ

和歌巻掛物かけすゑ方

かさりと云小巾を床ニ入大巾を物を床ニ横ニ飾り
草庵ニ一幅飾りを巻板ニ幅對ニ中ニ巻板也
床ニ順逆ニ巻ひらく床ニ下ヘ方ふし飾り
ニ上座ニ飾ニ事ハ右ニ飾ル
ニ一下座逆床ニ時ニ油を上座ふしく和歌文字の
むき宜と云一流あしとも床ニ順逆ニ巻ひらく油本下座
ふふす色ー和歌押板巻ふあさ色ニ

順逆床

南面小面書院方ふくさ　空蒲法有り　草屑小床ふ

順逆右ふくさ　云ふ不及

法樹竹　矢筈人ゝ稽古別第別一也　こうさきに記別第記

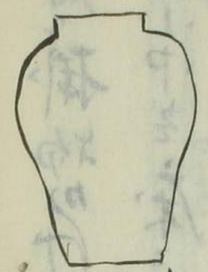
底小指を三つ分ほどし

大小ゆるゝ

茶入

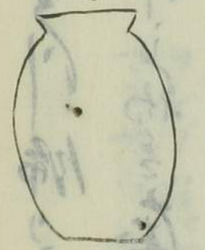
九壹

文林



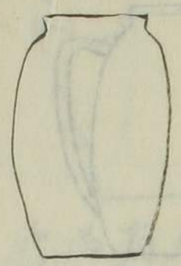
右ニ同

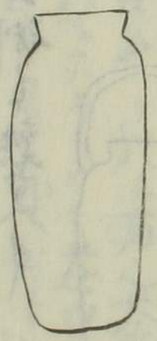
茄子



右同前

肩衝





右同

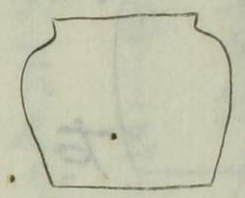
尻滿

右ニ同

瓢簟

右同

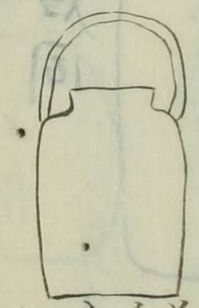
大海



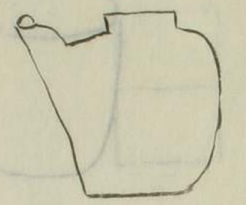
袋ようのもの　茶入時同前にかくしけく茶筅入れるはあしくすくひて入へし

湯沸

左側を熟すへし　茶を入時耳付し茶入同前に入得申し　行鶴付茶入時大指と人さしゆび鶴の所けあらいなり

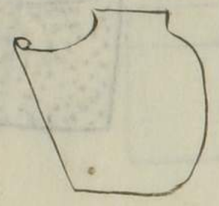


水滴



口こと方宮付三宜合す申し　茶入時ちいも耳付同前に口九ノ方耳附ちとくろ紙も有り又口斗りもいも有之茶杓口ふもくせ是口もいも大ちいふく茶巾入かくし　ハ口つるとくふ仕れうり和くせしく仕を待へ

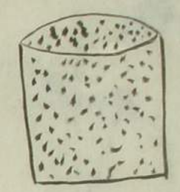
同



笠耳

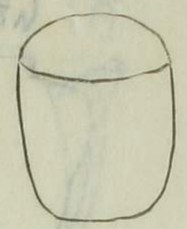
草庵に用ひし中なし　信楽仕上物　清晨子ハ是を用ひしなり

金輪寺



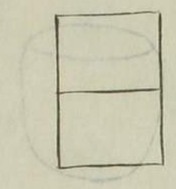
後醍醐天皇芳野皇居ノ時勅定ヲ
出来シ神器ノ勅使故爲ニ載漢物ト
同様ニ扱フ長緒付クル倉物ニ一字
金輪ト銘ヲ彫リ寺ニ今ニ有ル

東ゝ

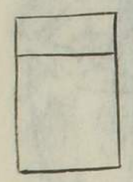


利休大中小ニ茶ニ又其外大小アリ袋ニ入
薄茶ニ不及紹鷗利休重寶ト一ツ之
帛ニテ重箱上ノ丸クロキウロスヒ又イモノ茶
入宮ノ好ニ有リ底ニ名下ノ板ノ所ニ名
入茶ノウロシ改メテ出ス中名下有ハ茶ウロスニ
不及ニ中切ノ板ノ貴敬ニ中ノ名下
無ニ不及薄茶入上一文字ニ付ル

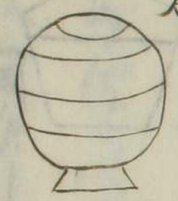
中次



ふゝ紀



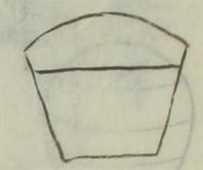
茶壺



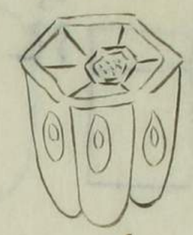
利休好ノ行先シレンヲ以名付リ
中次同前シカシメンノ小茶壺同前

薄茶入ノ茶壺ノメン形ヲ上文字
フキテ其後メンノ形ヲふく前ノ字
シメテヨシ利休好ハメンナシ

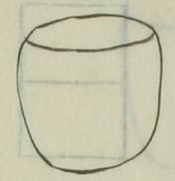
利休好之



漢物ニ有リ濃茶又薄茶ヲモ入ヘシ



中次同前



薄茶入右仕りこハ濃茶入ト袋ヲモ入ベシ
ふくろやう中次ニ同シ

一服ノ小棗ニ口切又ハ子細有テ二服ミテ仕ル時ハ用想ヲ茶入ニ形有ニ成ル大形右ニかくかと宛遣不載之

袋ぬひやう切ハ茶入ヲ下ヘせいをくきを上ヘと
ハ得命ー

代名入紙子ハ半唐物名物をゑす帷子ハ
普廣院殿御所ハまくるを添り来ル巻物ハを飾りなり
金入錦ハ対文字くしく仕れ唐ハ用ひかるし紙子ハ上
下ふくろを長く和らふく守り仕れハ用ひ所也せ
後ハ唐ハあゆら〳〵すくぶ〳〵す地ハ金入さのゝ上ハ
添せし仕用ひし人多し古風ハ長く唐物ハ

紙子とかけ賞翫す食入重不入俵二つあり秘
事に傳むすむ方かしあり

盃 口方 九 葉入 松木 彫物

中盃

天目七種

建山 硬被 曜變

敵盞 油滴 烏盞 熊皮盞

袋ふ入不入佛方壺ふ載不載佛方客者格等

茶碗

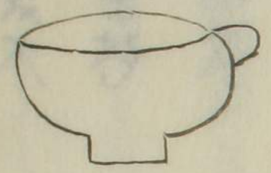
茶巾ふく如く時まづ底をふき照をつけ廻してふく
茶筌は位穂の方を下へしく吉筌位に平茶碗ふ
ゆさとさし湯を茶筌ふ初り湯多者れハ茶筌
をまわしく茶立ふ平茶碗位口ふ湯多者れハ又
さしれくあるふ多ふ立てまづおし入くふ皇位
後ふさし湯ふかしかくしたの茶碗の加減

あしき迚茶湯にて茶人に不受之

湖

皆曰掃部所持し名物にて木地たきこる羅乃四ツ目ふとしと云り休曰湖と名付所なり茶杓を削りて敷田に茶杓らるしと云度しく十五日杓を十四日中往有りしと云り掃部茶巾をたたされ湖のごとく仕り此に対し天目のこと茶巾をさられこと秘蔵と云休名付杓を深好うしきたし申候茶碗ハ湖のごとく用

さらし茶巾一所さを金少くよしとされとも長さ七尺さらあり天目をさらに丁寧をなり湖ゆさ茶巾者れよりたゆうり茶巾も方斗り長くせらるしと長茶筌と云あり



茶巾とも云伊勢にを上座かるす金
[illegible]
く水をうつすにを我右方さたく示し
ふくにをとりあしらひ如にこた
きるに茶巾折りけ也したり乃方ゆく
ふきおさ光世にを右ゆかしくき(ゆ金
茶入く云取ときうり口乃下ふたりれ

多信ふくたらかゝ（かゝもあくこゝかり
三角したるくさにうう余りあやは
丁乳半ばり客前ふ出すさを客
うたかしくさ仕あたりくふ或て
右多をにはりうりと添う
右心角しさし男角縁の事〻

うす茶碗

若茶碗

若茶碗結様第三事有しに伝袋
入用ゆ茶盤を天目ふ添うる左見
盤力

代袋入茶碗

秘蔵ふ物代袋入ふしく用ゆ天目ふ茶碗袋入
ふる事 珠光所持ふ名物茶碗天目同前ふ袋子
角縁代中 棚ふも云用し 世迄風を以名ふ茶碗出て心
代袋入ふ天 事有り

茶釜　油長　長茶釜

茶杓　仕れ　茶七形

代袋入　角同　折多免左実

はの袋入かしく瓶子か飾る事有り号瓶袋相か
ふも用ゆ是こは実説なり秘に伝茶七所古風俳諧の初
多くは茶道休茶屋茶初りくらう出来すいれ一事
多く筒折と是ふ所

花入　竹筒　尺八切　一重二重　鶴り付
水ふくしめれも用ゆ二重筒茶屋ふ如二重たに
花を生ケまく上をのけ下斗りに切ふり鶴り切も
上ふもくし

花を水ふ入ふすす事ふしふ高もかくらぬべらふ寄
屋ふ下ふ生ケ事ふ床ふても薄板ふ不及

瓢　花筏　同前

青磁古銅　別ふ記ふ事ふ相直ふり自然茶菴ふ用ふ事
もあり

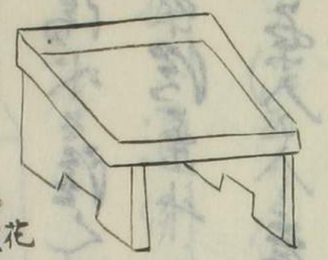
年月　客年ふ方一元福ふ人ふり古実ふ傳

舟　床ふ中ふ鶴事前ふ記スふ如ふ出船入舟ふ
下筒ふ角一つくさりふ方角さ沢之形ふして
石物ふ花入ふ相直ふ花ぬもへし

石多洗

古織或時世のけふ出られ同行に内より花持来あり野
掛ゆへ花入れ・織部せんぎしく勝あふあり
切さめ花を抜き氷たるく島の〻川辺をたゝして
神乃中へ金花を生れ花を拾枝と名
云伝ふ同行元感心せり玉たるたゝの美入とく
当一ふ元を色〻多洗し氷さしを元り遠て石洗
乃氷さしと芸〻しく人あり尤ふあり次

花折浦　小刀　手巾　水指



石洗九寸九分　横三分
縁高九分　外法七寸
足高九分　三寸八分　アシ　板巾三分

切カキ横三寸八分
竪二寸六分

花
足折浦板　右三ヶ所直スヘシ石ヨリ花
ふ色〻好色入用之水次を焼物金物〻自古

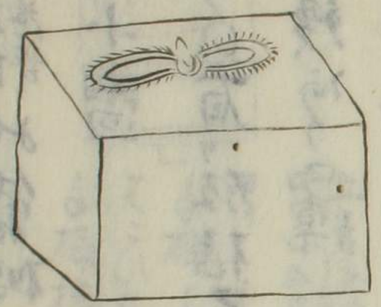
水指　古瀬

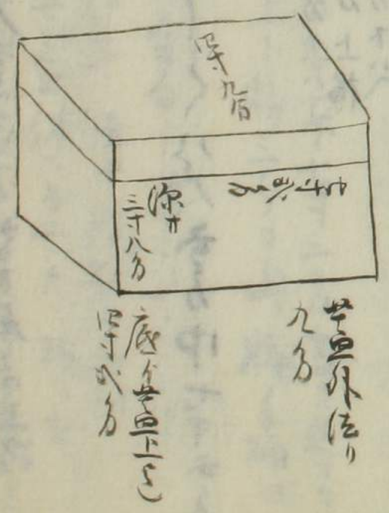
古洞　白洞

之合配合別紙可し水指元来清湯をかきく立合き
后数こ氣ある物ゆへ茶目切向炉風炉共に其侭し
こ座半こ〻て氷水指を湯こ〻加ふ掛ゆへ赤乃杓子方形
あり杓半分し伝傳三度水指風炉ふ配合す時二度赤ふ
すべし大湯水を注こ井逆風を以炉ぬ対こ〻ふすへし
濃茶薄茶濃茶汁こ二種も共こ〻ふ行次ぬ茶入ル濃茶
を秘ふこ茶入こ入こ薄茶者こ中次こ〻ふ封完こ有之道
もあり対切棚等口傳ふ大小を茶入ふ伝ル

茶箱茶入袋入形

桐白木





茶箱茶入会ふ用
利休好こ寸法あり代々入備ゆへし袋唐物木綿類
こし之例ふ通例ふ

盃板四つ 木地漆塗り 外側 二尺 大小圓

体に大小たらい有り 板枠 高サ二尺四分 巾七寸五分

左右丸き大鍋ゆり口薄

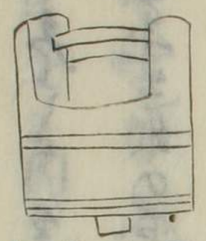
七寸五分 上八下
六寸九分 上横
六寸四分 下八
六寸弐分 下横外法り
板厚三分ニツヨリ
六寸二分 底より上六寸五分
汁桶四寸 上六寸五分 汁
底ノ八分ト汁巻二本
フリフタ糸メニ有メンヨシ
ウワ汁ニテ外ル指板ヒキ彫
カクリ上木四分合
トリテハ八分メテ九分
旨オ五分 高サ八分半
ツリフタ上ニキホロ川

鍋底を作るとき下ホ底見えぬようにくるくるとうこかさす後まく盃

外くるよりも横ホ合角しー

真くら桶市ゝ茶碗を入りくる先ゝ茶碗ホくるくるし四字

用才一口切朝會抹茶



上茶碗ヒ八寸二分 入リン 下七寸三分 高サ四寸
口ヒ 六寸八分 上下 縁三分ヨ 上ノ縁ヨ桶口
ヨリ三寸三分
ヨ桶ヨ横ホ盃角しくるくるし
たるこ板口傳 炉斗ニ用ル風炉ホ 高サ
ヨ桶横 沼ヘ三ホ盃 体ニ 二ツ ニ横ニ盃
くしと云ぬり茶碗不若 たた実有り口傳

炭斗　茶道具　始まる

切り方　炭を用をふくへ用ゆ　炭を切り秋と共に竜用ゆ
ふくへ其年出来の炭を切りて用ゆ　炭を別に分く用ゆ　体を云
歳りてもふくへを以用し　串　炭風炉に用ゆ　事又しず
凡香炉を炭斗とす　草庵に炉　至半有り　名物を使
今もすべて炭斗を上座に　上座に客を人〳〵
うるまに関白し　妻洞を　記すさとし　手桶の
香炉　ありさまを　ものを　右をおきておはして　関白

炭押　炭に有り　香炉の　炭斗有り　右炭斗
すべし　香炉　相所要　炭おこり　炭を炭
炭をどふしく　右香炉　石相　加茂　薄多
し又　草庵　用ゆ　香と　用ゆ　切胡　貫暁　板
今伊　云ふ　用ゆ
香七炭七　暁　入　炭　香七炭七　炭七立　炭を使　炭上
可用　草庵　炭七　炭七　炭を以　香炉　炭　焼
焚香入　焼　焼　炭　炭　銀板　雲母

代れ入又不入

前の記入ごとく悪しく香炉佛に事 位牌以上書院

又は堂ごとり 位式板 有り 写れ小草庵(稚)

香道 供合 室板 供合 室所 香入板 草

色紙 色色 色色 色色 秋 色 木地 塗物 色 二色の為

絵きゆ(し事)香色 色の少て 人八 賓室板 室ごと 居こと 諸

香合 諸 事 板 一 香入板 炭 時 ふ 諸 皆 ふ 別 也 更

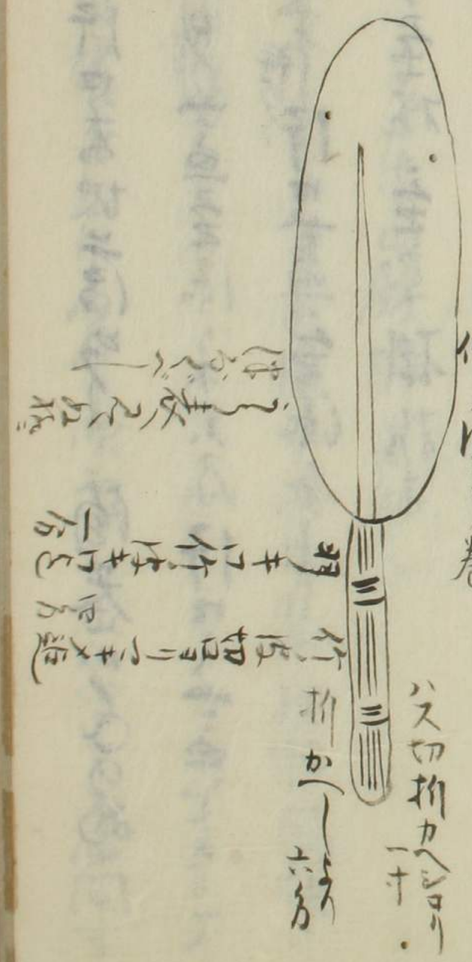
不 時 ふ 浄 し 香 有り 有物 其時 ごと ふ し 諸 こ

羽箒 位 ふ 級 三ツ羽 小羽

つく 稲級 草 庵 ふ 之一 形 面 級 之 羽 と 手 位 家 ふ 記 入 順

逆 面 り 須 香 合 室 合 ふ 時 古 く ち ら 方 ふ 室 (し 小羽 凡

炉 ふ 用 ゆ



羽 ケ六寸七分 中 庵 ケ 八分

竹 ノ 皮 ミ ケ 巻

水次所に木地薄めり　陶器かくのあ

木地所に薄めり　土瓶　所らみ不及　所に土瓶をえりて

茶こ土瓶　（薄めり）所に茶瓶　金添瓶

柄杓　金物　柄杓

草庵所柄杓　所柄杓　金茶碗　金瓶　金杯　塗ひて金物有り

趙屋

天子に支所に所用ひの香炉と云り　伝ら茶瓶　用時

に賞翫ら　草庵用ひ　例　秘事　伝

夜学印と文字漬屋おかしく　柄杓　ゑこ付くこし　此

杯も同様　能阿弥所来　除弁　禅師　市形　茶瓶

こ　用しこ　品物　こ　前し　時賞翫　趙屋所

同前人得　印　草庵　用ゆ　夜学　白く有

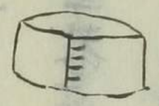
夜学　師こ　東山殿　師名物

大草瓶　上ゆし　又　用ゆ　大草　炉風炉

相爽　つ　隙ふこし

川切竹　自宅　切　炉　次　文字　不留す

角し想しく底合し道具其外元捌きホゝ机或オホ
對すゝ事一人ハ切ゝ左ケ合ゝ事四ツ度す角し高ケ同示至
板底ホ口傳多し荒ゝ書付しとゝ丸師傳可閑



水ホ用し紙人ハとし先
高サ四寸六分
廣 四寸七分
板厚サ一ト
底板係ハリ
木板ヲ

面テ合せ先ハうゝ合せめまゝ口半トシメイトシメ板りまて
寸六ゝ面板ハしハ使用ス一ヲトシメ板六ツとしめ袖ス
す角し寄付ス角ハ〳〵す

白銅匠ハ
合子耳ハホゝ名物ゝ〳〵ホ用板ゝ次第ハ白へ
ホしゝゝし左ゝさゝ板ホ指ス事ホし

ぱちゝやう

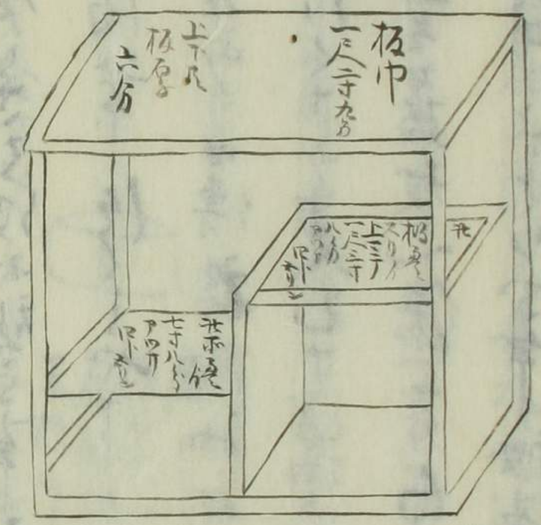
柏祝帖茶 ハ
蝶角ゝみ小女男あり口傳板帖袖ハ用ゆ角し巻
ゝ大小ホ係り作くさホも又也すび切りホも包ム角し
巻道箱ゝ甘皮ゝ皮道打ゝ結ホ付白きゝホゝうえハて
り封をする封のゝかとゝホ事袖ゝ

袋棚を紹鷗初め其後金棚抔多出来とも袋棚ふるしいふ〜〜百年ゟ内おとらぬ棚〜

紹鷗好

秋名とも大昌〜庵とゝのふるまは袋棚ゟも秘事とさたせり

京五条五条須磨云〜溝り〜大昌さるゝひゆへ云云

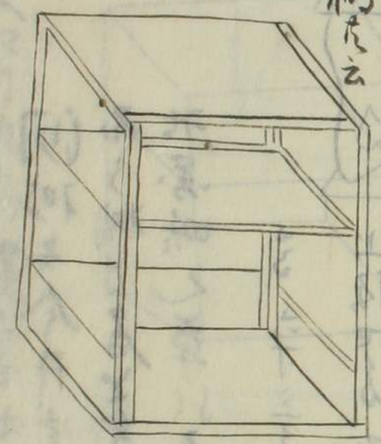


カウスカシ板左右
作り洗

袋高サ六寸八分
板長サ一尺四寸
厚サ二分

城構棚

天王寺屋宗及作之夫故宗及棚とも云又袋棚迷宗切棚共云



高サ二尺六寸
横一尺八寸
幅尺一寸

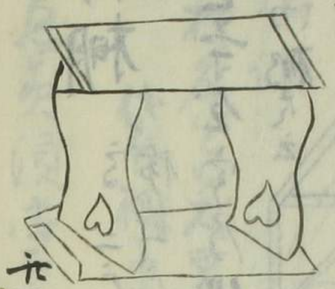
下板厚八分
腰板高サ四寸二分
小板中板下板
厚サ八分一寸

不作之袋棚〜〜人得すゝ〜城構棚も中棚炉

ふと香方流好と云り

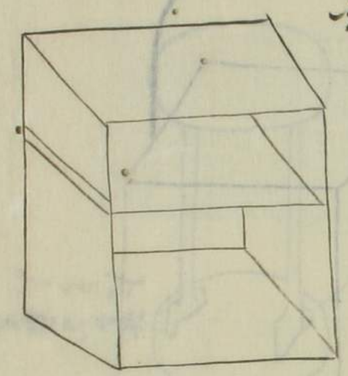
代棚ら地板みく暗ら物之利休好之桐白木ガ
蒔ぬり有り

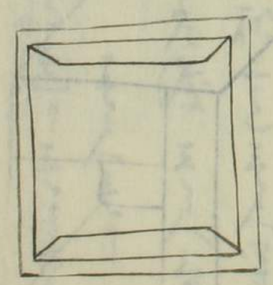
洞板



洞板ハ今井宗久他之大林和尚
ふら棚と名付し之板先一ツ物ニ信
此器暗く差し事ハ五十合セ之板しめ之
高二寸三分内
上板巾ハ下ニ分
入三尺八分横巾同
此下ニ竹打打帛掛る

利休箱好之
内ノ器

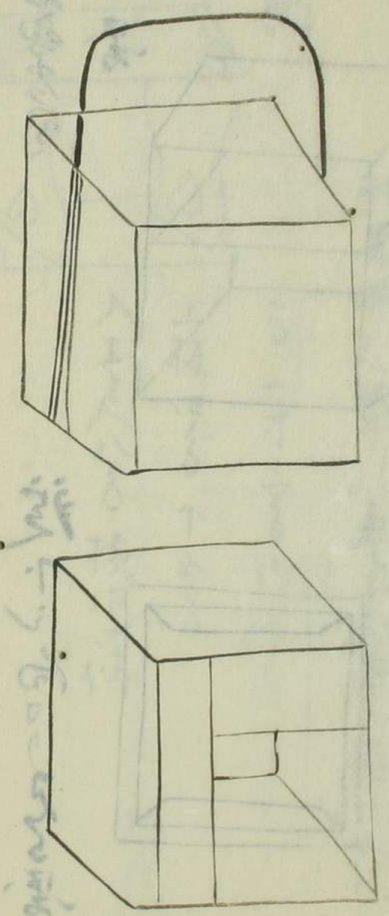




蓋下シ向ヨリ見ル器

高三尺八寸九分横厚惣板巾分横外法り
三尺八寸六分　内法八寸九分

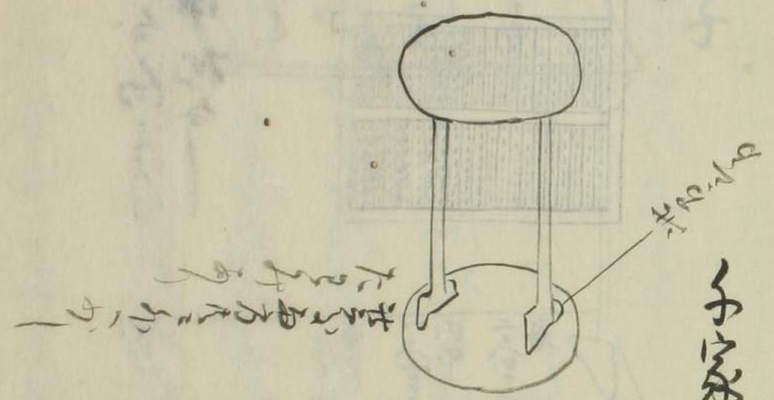
世箱箱を小田原師陣に対持参云中柄先〜
為すやうにとて弟たると有り



源氏家紋所持

宗伯唐と細物と箱を田原打名物と茶箱に用ひし〜

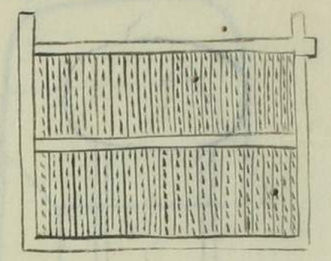
九似

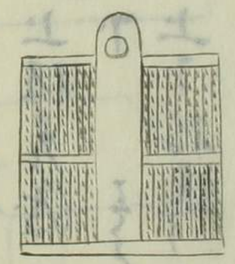


手家に有る体好し。

長サ柄上と長八寸七分
上板巾濃 長八寸
下 長八寸
上下板迄 三寸六分
高サ 長寸八分
足三ツ
高サ 六分
横巾 六分
アツサ 四分
柱 七分四方 一分九

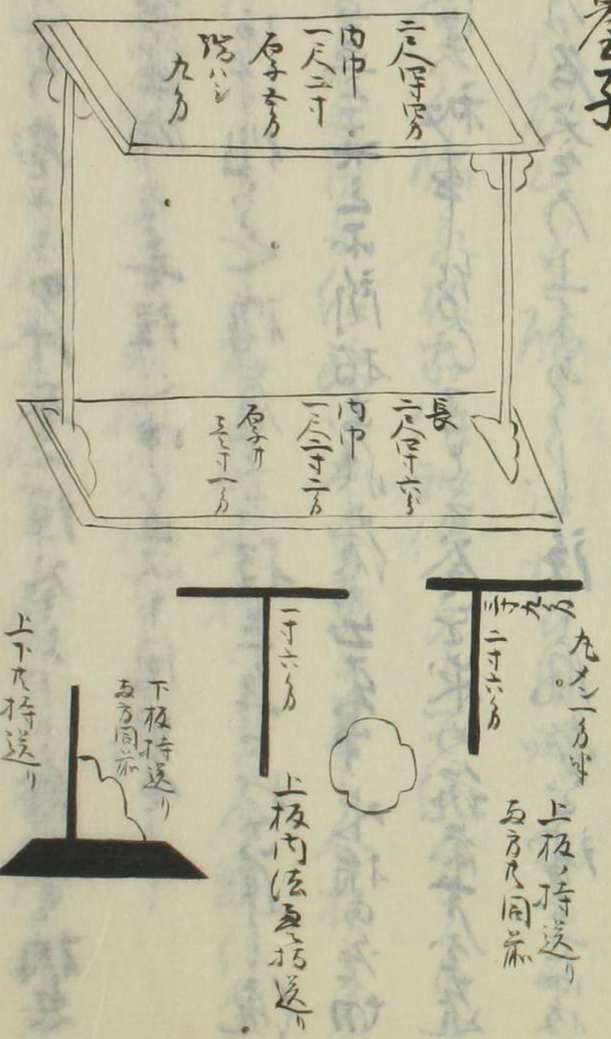
よしたが向うの
ろくろ器中板なし





脇ろくろ器

及米皇子



師ハ茶ヲ略匂ヒ[illegible]ニ亦[illegible]
人序遠ニ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
[illegible]次長[illegible]師ハ長程ニ中[illegible]以下用ヰ[illegible]
中板[illegible]ハ[illegible]ニ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ノ[illegible]ニ[illegible]ハ[illegible]ニ[illegible]ハ[illegible]
退[illegible]ル故実秘事[illegible]ルト云[illegible]ヲ求メ[illegible]
ト云者ノ名[illegible]ノ上[illegible]
人師ノ十[illegible]ハ[illegible]ト云[illegible]

扨立合ノ子ハ[illegible]ハ[illegible]ノ師ノ[illegible]ノ[illegible]
ハ羽鮮ニ風炉[illegible]ヲ師ノ[illegible]中板ニ用ル略[illegible]
名物ヲ掛ク[illegible]師ノ秘伝ハ[illegible]
平座補ニモハ用ル紹鷗ハ[illegible]ニ[illegible]
ニ用ヒ[illegible]ハ[illegible]ハ水指ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ秘事口傳
[illegible]人[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
入ル略[illegible]

一人ぶすまを居る程の一寸五分ほどの大きさ小風炉と用ル大きさ小炭を用ゆ唐合鐵蓋を
羽帚抔なく小風炉ばかりにて蓋なくし略ありて板より
ふたをかけかくの如く故に必板の道具不足云

炭とり旋蓋
九寸五分

瑞雲漆二寸八分高
穴三寸六分長
横八分ありし

只点前相用ル
板長サ巻箱上ゲ一尺二寸六分
横巾一寸二分メン一分厚サ
蓋箱高サ四寸六分内蓋厚ミ四ト六リ
長ニスリミ底ニテ横長七寸五分

利休燈臺と云り草庵中に用ゆ

板長サ九寸三分広サ六分四方メ

蹴込厚サ二分六リン 周巾九分六リン

蓋高サ九分
六三寸二分
厚サ五分

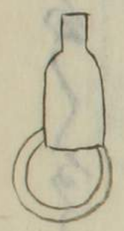
板ノ立板
面ノ仕板

蓋高サ二寸六分
瑞雲漆 厚サ三分
四方五分六リン メン

源氏燈臺

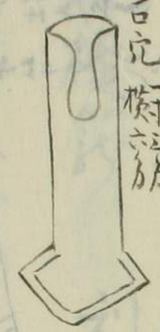
四方中ほど用草庵ほど石相応 蓋上方三分ほどの燭台ほど油
皿ほど使ひ と云ふ 源氏ヨリ云

掛灯

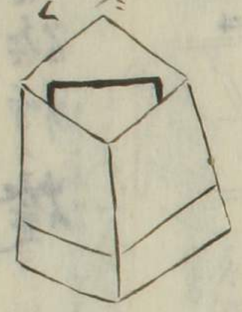


何ミテモ用ゆ定寸なし
高サ白木ミテモ
下ハ九又角ニモ

夜学燈形さまくさまの記しかたし大小あり直り
掛灯之事なしとかりかなも又屋き物形壹寸用り
大形夜学多し
燭台之通り口真之事なれとも燭草庵は不相
庭燈物又之食物之小き燭
小燭臺台之通り真ふぬるくるふ小振成燭臺多り
真之庭席の用茶席多之不相応
竹籠



沈うけ竹 二寸六分 横一寸四分 高サ三寸六分 竹長サ一尺二寸 板ノ厚サ横四寸九分 四角三寸宛 樹脂



草庵不相応

燈籠

立迫ひに用中床灯籠也
サヤ高サ外法八寸六分
同下ノ廣サ同 八寸七分
柱之サ四方寸
臺高サ三寸六分 板厚三分
サヤ上廣サ外法八寸四分
真ん中竹中九分

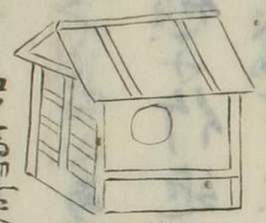
露路行燈

蓋板たゝめり
蓋上巾外法八寸六分
同下、　八寸六分一分フクリン
同縁高サ三寸六分
柱厚サ三分半
オヤメフカサ　六分
蓋板ヨリ二ツて縁ヒくサ九寸八分竹巾　六分
トロテ上ハヨリケムリ丸シ上迄一寸八分
ケムリ丸シ板巾外法七寸四方
ヨヤ上廣サ外法七寸
同下廣サ八寸
高サ八寸
上穴廣サ柱三分ニツヨシ二分半ニスル
下穴　三分半
上板廣サ八寸二分オヤイかし居カマル

木燈籠

利休灯籠之露地ニ用ル

高サ三尺六寸
横　七寸
入り一尺三寸



柱長サ八寸六分
四方たミ同シ
たり七分四方

蓋高サ一寸六分
蓋深シ九寸四方
四方

コノ高サ一尺六分
竪ニ蓋深シ六寸三分
巾六分四方たル同シ

左服
三寸月六寸

ウシロ

油盞　下四　竹輪　桃子
灯心押　長紙　浦紙

右のものも燈ゝ器之内ゆゑ人下四焼物ゝ竹輪ゝ油盞ゝ可点桃子竹輪ゝ近ゝ京ゝ長ゝ中ゝ長ゝ云ゝ所ゝ抜ゝ
くゝ長ゝ紙縒ゝ長ゝ尾ゝ相ゝ内入ゝ角ゝ鼻紙ゝ切ゝ形ゝ
縒縒ゝ下四下ゝ成角ゝ

懐石　折浦　盞　飯次　椀子　椀
四盃　酒次　湯次　カンナベ　水次

香煎入ゝ下ゝ雑有略次

右利休好今席入用ゝ有ゝ酒次ゝ湯次のやうゝ
ゝ抽ゝ所ゝ物ゝ盞ゝ人ゝ盞ゝ角ゝ古織好ゝ出来
ゝ依ゝ盞ゝ中ゝ盞ゝ中ゝ歳紙ゝ云ゝ具遠ゝ人ゝ器又
珍ゝ成ゝ有ゝ

仮屋ゝ中ゝ人ゝ三四人ゝ食ゝ中ゝ食
ゝ禅林日用ゝ作法ゝ紙ゝ利休大徳ゝ南宗
系ゝ利ゝ折ゝ仮屋ゝ成ゝ

りふせまを以て入るべからず二三口呑て口呑てゆるし茶
を口外今一口を左傾るして入不好事と云
居る者之巻かくのごとき婦人ゆく清免仕の振みるを
此仕を入世間とし又下に汁うどんとかさ称客羽八半門
魚ゆるくく運ぶ一番ゆる汁次ゆるくと入世家を
揺みくし神みても異ゆる分又合之酒を仕振のふるを
のむ之仕法此料理悔文から〻くしくよし茶うけの物
杯木ゆ匂得仕法を魚肉料理し叶てをるし小食
是を人前之常ゆ折浦同家匂得せふしんの時相違
ゆり
神一奥 應量器 次神之 神ノ子椀
徽 食事ゆ好ゆ之於ゆ之意ゆ 巳 箸
刷巳 絞巾 膳中 折敷紙
羽箒 折水桶 すゆ得於ゆ之意之
陽味得者大酒禁之
右神奥神林法式草唐此茶 神林茶味一椀之以 安

由記ス

師ノ奥草庵ニ用ヒトフニ不及候尾ニ小さきをきうり
事所ノ内ニ行ヒて折紙徽水指柄杓用ノ
懐席ニ禅林ニ有ノ栗石トいふ同し温石ニ備ニ
しく候ヲ以ノ事ノ禅林ノ小食夜食
抔ニ心ノ公同意ノ草庵相違ノ為ノ石白
右

南坊宗ノ同宗一冊本宗ノ自筆具外ノ事
ノ御物語ノ度ノ書付ニ既ノ以自家ノ
貴重書二冊ニ有ノ若ノ得遠ノ此御中ノ
事ニ茶器物ノ得心ノ不成作天地掛陽之光
来ノ御添削ノ成ノ紙帛ニ茶ノ秋等
ノ事ノ御席ノ紹ノ秋等
茶ノ事ノ以上

宝永五戊子初夏日　寧楽庵
宗扑扒

法号

杉月菴主寶山有禅師

道桂

朱印